原因を徹底的に究明してもらいたいという手紙（後掲）とともに、大島さんから届けられたものである》

石原國利君が報告してくれた「ザイルが切れた時」の様子は、こういうことです――。

三人は、一日早朝に標高二千五百メートルの奥又白池のベースキャンプを出発、午前八時ごろから、厳冬期未踏の前穂高岳東壁初登攀の挑戦を開始した、ということです。

しかし、日没になったのと雪が降り出したのとで、三人はこの日の登攀を中断、身を寄せ合って狭い岩だなで羽二重（はぶたえ）でつくった手製のツェルト、簡易テントですね、これをかぶって厳しい寒さをこらえて露営し、翌日の挑戦に備えたというんです。

ベースキャンプでは、この時点で東壁の登攀終了まで約三〇メートル地点に到達したことを確認していました。

翌二日は午前八時ごろから登攀を再開して、トップを石原君、セカンド五朗、そのあとを澤田君の順で岩壁にとりついたんです。

石原君が岩の割れ目を登って、頭上に突き出した約九〇度の岩角にザイルをかけまして、往復二本のザイルを握って、その岩の上に出ようとしたけれども、うまくいかなかった。三回やってみたけれども、どうしても越えられなかったので、今度は五朗が交代して、トップになったんです。

そして、石原君がとりついていた壁の右側に、コースを少しずらせて登ろうとしているうちに足を滑らせ、五〇センチほどずり落ちたそうです。

五朗の体に結ばれたザイルが頭のすぐ上にある岩にかかっていてザイルは体に結んであるんだから、ずり落ちてもすぐ停止するはずです。それまで使っていた麻ザイルでは、それが当たり前です。

ところが、五朗が「あっ」と声をあげた瞬間、体が左に少し振られるようにしてナイロンザイルが音もショックもなく切断してしまい、石原君の大腿部をかすするようにして、五朗は谷底に転落していったそうなんです。

p103

石原君らは、必死になって谷底に向かって身を乗り出して五朗の名を呼び、姿を探したが応答がないまま時間が過ぎ、精神的ショックから、それ以上登ることができなくなってしまってその場に留まり、そのまま夜を明かしました。

ベースキャンプから見ていて異変に気づいた岩稜会メンバーが東壁の頂上に駆けつけ、他の登山パーティの支援によって、二人は翌三日の夕方、下ろされたザイルで引き上げられて救出された、というわけです。

新鋭のナイロンザイルの切れた状況を聞くと、それまで使ってきた麻ザイルにはないもろい切れ方です。石原君は、

「信じられないですよ！　バッカス！」

と、言いましたが、これは私にとっても同様でした。これが、遭難の概略です。

《登山（ロッククライミング）で麻ザイルが使われていた時代、麻ザイルが切断したことは時々あったそうだ。しかし、ザイルが古くなっていたのではないかとか、落石がザイルを直撃したことによって切断したのかなどの類推をされるだけで、切断原因まで立ち至って究明されることはなかった。新品ザイルを